

山路愛山著・山路平四郎校注

『基督教評論・日本人民史』

清水 茂

本書は、巻末における山路平四郎教授執筆にかかる「解題」にあきらかにされているように、明治の代表的な史論家のひとりである山路愛山の名著『基督教評論』（明治三十九年七月、警醒社書店出版）の覆刻、ならびに、愛山がもってライフ・ワークとしたようにしたといわれる晩年の未定稿「日本人民史」の、最初の活字化である。

前者の『基督教評論』の方は、はじめ「現代思想史上に於ける基督教の位置」と題して、愛山の個人雑誌『独立評論』に分載されたものを増補して、題を「現代日本教会史論」と改めた論文と、おなじく『独立評論』に発表された「耶穌伝管見」との二論文から成り、本書に覆刻するにさいして、総ルビを一部ルビとするなどの校訂が施されている。

「現代日本教会史論」は、教会史とはいいいえ、基督教の盛衰を中心として展開されている好個の明治精神史、思想史論ともいふべき論文で、後世からの揣摩臆測によつては捕捉しがたいような、時代精神の屈曲伸展の機微、微妙な氣息が、同時代人としてその深部を生きぬいた愛山の適確な史眼によつてするどく浮彫されている。その後世の研究者に益するところは、たとえば、木村

毅氏が「明治大正文学夜話」（『国文学・解釈と鑑賞』所載）で触れているのをほんの一例として、たいへん大きなものがある。筆者なども、明治の変革と文学との交渉を考える上で、啓発されるところがあつた。

また「耶穌伝管見」は、愛山がみずからを「千九百年前のイスラエルを旅行しつつある不思議の」日本人に擬するいっぽう、その質疑に答えて、イエス出現にいたるこの地方の精神史・思想的いきさつを説明する「歴史先生」を設定し、その口をとおして、信仰を必然とした歴史の外的、内的条件を、歴史主義的立場から縦横に解明したもので、「奇蹟はイエスの時代の物にしてイエスの特有の物に非ず」とし、また「パブテスマ」のヨハネとイエスとの関係を、法然と親鸞との関係に擬するなど、愛山独自の合理主義的なキリスト教發生史観が興味深く展開されている。

さて、「日本人民史」は、「世ニ謂フ史乘ノ通則ヲ無視シ、唯我心ヲ自由ニ語」る態度——たとえば、

人臣ノ死去ニモ其人ノ官位ニ依リ、或ハ薨ト書キ、或ハ卒ト書クナド色々仕来リアルコトナリ。サリナガラ我等ハ一切左様ナル礼儀ニ頓着セズ、死ニタルモノハ唯死ニタリト書クコトニシタリ。

といった、「無頓着ノ流儀」によつて、「文章モ俗談平語ヲ用ヒ」とあるように簡潔明快な文章体をもつて、庶民の立場からする、官製の「国史」ならざる「一個ノ野史」を創造しようとしたものである。通史を意図したものとおもわれるが、残念ながら、有史以前から筆を進めてきて、歴史時代に入りかけたところで、稿が

とぎれ、愛山は死去した。

詳細な「解題」が、山路平四郎教授によってくわえられているが、一、二の蛇足を述べると、その史観の根底に、「日本ノ史家が賊ト云フモノハ大抵ハ言論ノ代リニ兵力ヲ用ヒタル変体ノ政党ニ過ギズ」、「反上抗官ヲ恐シキコトニ思フハ支那流ノ思想ニシテ日本流ニ非ス」といった、愛山のいかにも明治人らしい反骨がすわっており、これは執筆当時の日本人の史観としては卓見であったということが一つ。これは、彰義隊・五稜廓に参加した「賊」を父とする愛山が、ぜひとも言いたかったことであつたらう。その日本人起源論にみられる、日本人種混血論とその中核となつた「狭義ノ日本人説」に、愛山という一個性にあらわれた、明治のナショナリズムの幅と限界がうかがわれることが二つ。すなわち、漢人との社会的接触をもつて、歴史時代の開始とするようなところに、いわゆる「皇国」史観に反撥する、愛山における自主的な国民意識がうかがわれる一方、「穢多」をもつて簡単に日本人中の「異類」としたり、日本人の「政治ノ才」を、起源となつた人種の性質に帰するなどのような、今日からみていささか無稽の印象をあたえる思考もちらついて、なくはない。

とにかく、明治思想史、文学史の研究にとって好箇の参考文献であると同時に、それらにおける史論家愛山の位置をみきわめ、再評価してゆく上での重要な資料が、ここにまたひとつくわえられたということができよう。

(岩波文庫・百五十円)

稻垣達郎監修・文学批評の会編

『プロレタリア文学研究』

(現代文学研究叢書1)

—プロレタリア文学研究における人間復活作業—

中 村 完

この論文集には、「葉山嘉樹」「小林多喜二」「三好十郎」「中野重治」「平林初之輔」「小宮山明敏」についての六篇の作家研究と、「文献研究」として「黒島伝治」「青野季吉」「若上順一」の三篇、そして「葉山嘉樹資料及び年譜」と「小宮山明敏資料及び年譜」が収められている。以上の内容構成をみてもわかるように、この論文集の対象に据えられた文学者の多くは、大正から昭和にかけての転換期に文学者として政治思想を生きた、問題の作家、評論家でありながら、イデオロギー絶対化を基尺として思想実践からの脱落の契機の問題を故意に無視してきたようなところのある、従来のプロレタリア文学史の上では、不当に評価されてきたような人々である。しかし問題は「ナツプの眼鏡」の、非政治主義や芸術至上主義にたよる人間的なはずし方にある。この論文集における各執筆者のモチーフも、いちおうそこに置かれていようだ。葉山論や三好論などは、意識して「人間」論としての枠を打ちこんでいるわけで、そこに、プロレタリア文学史定説の修正問題をこえて、近代日本史過程における知識人の思想の間